

ポローニア

paulownia



塑像：「自分の手を表現しよう」（附属桐が丘特別支援学校 中学部3年製作）

目次

教育長挨拶

巻頭言「グローバル教育:大切な要素は初等教育から」

◆宮本信也……………2

第1回 SGH(スーパーグローバルハイスクール)活動報告会

◆那須和子……………2

第2回 SGH研究大会・第19回 総合学科研究大会 ◆岡 聖美……………3

カナダ校外学習 ◆深澤孝之……………3

台湾台中第一高級中学との交流 ◆更科元子……………4

インド視覚障害者に日本の手技療法教育を ◆寺崎 直……………4

筑波大情報科学類の学生とのアプリの共同開発について 発表しました ◆齋藤 豊……………5

未来の教室でプログラミング ◆鷲見辰美……………5

Fieldwork in Japan (FIJ) での活躍 ◆関谷文宏……………6

全国聾学校合奏コンクールで小学部5年生が銅賞！

◆山本カヨ子……………6

卒業生を送る会 ◆沼澤聡子……………7

祝卒業! 心をこめておめでとう ◆高橋幸子……………7

第11回「科学の芽」賞募集要項……………8

特別支援教育研究センターと附属特別支援学校5校の 協働による特別支援教育 教材・指導法データベース……………8



グローバル教育：大切な要素は初等教育から

筑波大学 附属学校教育局教育長、理事・副学長 宮本信也



SHINYA
MIYAMOTO

グローバル教育が育成するグローバル人材に求められる要素として、グローバル人材育成推進会議（2012）は、「要素Ⅰ：語学力、コミュニケーション能力」、「要素Ⅱ：主体感・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感」、「要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ」をあげています。『要素』とありますが、具体的には、あげられている項目に関する知識とスキルや適切な自己意識を持ち、それらを活用して具体的な行動を起こせることといえると思われます。

グローバル教育において、要素Ⅰと要素Ⅲは、学校で直接的に教えることができる部分が少なくないと思われますが、学校内だけでは知識とスキルの範囲を超えることは難しいでしょう。実地の場、つまり、外国の方とのコミュニケーションを実際に体験したり、異文化に直接触れることがないと意識や行動の促進にはつながらないように思います。これは、外国の方と接する機会や外国で学習する機会を設定できれば、ある程度は達成できるものです。

ところで、要素Ⅱはどうでしょうか。要素Ⅱにあげられている内容は、知識ではありません。スキルはある程度教えることはできるかもしれませんが、本人にその意識がなければ、汎化させることは難しいように思われます。でも、グローバルな人材に最も求められるものは、この要素なのではないでしょうか。そして、要素Ⅱは、中等教育よりも初等教育から育むことで、本当に子どもたちの中に根付くように思います。英語教育とか地球規模の視点とかを特別に掲げなくても、こうした意識の下に行われる初等教育は、立派なグローバル教育といえるのではないのでしょうか。



スーパーグローバルハイスクール

第1回 SGH 活動報告会

附属高等学校 副校長

那須和子

附属高校は、平成26年度にSGH（スーパーグローバルハイスクール）に指定され、全国の指定校の幹事校になっています。指定2年目のまとめとして、平成28年2月6日（土）

「第1回SGH活動報告会」が桐蔭会館を主会場に行われ、全国から約50名の方々のご参加がありました。本校の取り組みは、「SGHスタディ（課題解決学習）」とSGHプログラム（海外派遣）の2本柱で行われており、取り組み全般についての説明、授業参観、生徒によるプレゼンなどを中心に報告が行われました。

「SGHスタディ」は、生徒全員が取り組む「課題解決学習」で、毎週土曜日に1,2年が「総合的な学習の時間」として取り組んでいます。1年は「課題解決の為に基礎的な技能習得」を目的とし、様々な角度から、8つの講座を年間を通して学びます。2年は1年で学んだ技術を利用して「グループによる課題解決」に取り組みます。1年の授業公開は、ご参加の先生方からの関心も高く、特に「アカデミック・ライティング入門」には多くの参観がありました。2年

は、課題解決の中間報告をスライドを作成して生徒が行いました。3年の夏には最終の発表となりますが、参加の先生方から質問やアドバイスをいただき、今後の研究に繋げることができました。

一方「SGHプログラム」に関しては、27年度に行われた海外派遣に参加した生徒によって、英語でプレゼンが行われました。ポイントをまとめて話すことの難しさを痛感したようで、プレゼン能力の向上が今後の課題となりました。

最後に、文科省から矢田裕美氏（初等中等教育局国際教育課計画指導係長）、中村一郎先生（国際基督教大学高等学校校長）、菊池美千世先生（お茶の水女子大学附属高等学校副校長）にご登壇いただき、「SGHの今後の課題と展望」についてシンポジウムが開かれ、ご参加の先生方との活発な意見交換が行われました。今回の様々なご指摘を今後の取り組みに繋げていきたいと思っています。



第2回SGH研究大会・ 第19回総合学科研究大会

附属坂戸高等学校 主幹教諭

岡 聖美



平成28年2月18日(木)、19日(金)に第2回SGH研究大会・第19回総合学科研究大会を開催しました。両日とも100名を超える参加者をお迎えし、大変盛況な研究大会となりました。SGH指定二年目の本校の取り組みを報告するにあたり、「総合学科が育むグローバル人材～Next two decades これからの20年で総合学科が日本の教育に果たす役割～」をテーマに、1日目はSGH開発科目「グローバルライフ」をはじめとした公開授業、シンポジウム「総合学科が育むグローバル人材の育成」(教員・卒業生・生徒発表)、1年次全員によるカナダ校外学習に向けた英語のプレゼンテーション、2年次を中心とした「つくさかグローバルアクションプロジェクト」



「国際フィールドワーク」の報告、さくらサイエンスプランで来日したインドネシアの高校生の発表、3年次の卒業研究発表が行われました。2日目は「総合学科とグローバル人材の育成」など3つの分科会が開かれ、締めくくりは筑波大学副学長・附属学校教育局教育長の石隈利紀先生による「15歳からの学校教育—グローバル時代のキャリア発達を支える—」を演題とした講演がありました。

大会参加者は、生徒たちが自分の意見を積極的に述べ、意欲的に授業に参加する様々な形態の公開授業や、系統的な国際教育の取り組みに大きな関心を持ったようでした。また、2年次の生徒の英語によるプレゼンテーションは圧巻だったとの声を多くの皆さまからいただきました。さらに3年次の卒業研究発表に対しては、総合学科教育を通じて培った問題解決能力、プレゼンテーション能力が存分に発揮されており、質が高い発表だったとの評価をいただきました。2日目の分科会、講演会では様々な意見を交換でき、大変、有意義な時間となりました。これまでの成果を来年度のSGH活動につなげ、より発展させていきたいと考えています。

大会参加者は、生徒たちが自分の意見を積極的に述べ、意欲的に授業に参加する様々な形態の公開授業や、系統的な国際教育の取り組みに大きな関心を持ったようでした。また、2年次の生徒の英語によるプレゼンテーションは圧巻だったとの声を多くの皆さまからいただきました。さらに3年次の卒業研究発表に対しては、総合学科教育を通じて培った問題解決能力、プレゼンテーション能力が存分に発揮されており、質が高い発表だったとの評価をいただきました。2日目の分科会、講演会では様々な意見を交換でき、大変、有意義な時間となりました。これまでの成果を来年度のSGH活動につなげ、より発展させていきたいと考えています。

カナダ校外学習

附属坂戸高等学校 教諭 深澤孝之

坂戸高校は平成8年度に韓国校外学習をはじめて以来、毎年海外での校外学習を行ってきました。平成16年度からはオーストラリア、その後台湾、平成25年度から3年間はオーストラリア、台湾、インドネシアの3つの方面から生徒が行き先を選択できるようなプログラムを取り入れました。そして、平成27年度入学生からはSGH事業の一環として、カナダでの校外学習となりました。これまでの校外学習は2年次の後半での実施でしたが、カナダ校外学習は1年次の3月に実施しています。あえて1年次で実施することにしたのは、2、3年次で用意されている国際フィールドワークや卒業研究海外支援プログラムなどの海外をフィールドとした活動への意欲を高めることはもちろんですが、各教科科目、総合の時間などで物事を考察する際、カナダでの活動が一つの視点となることを期待したからです。海外への渡航がはじめて、飛行機に乗ったことはじめてという生徒も多い中、安全にプログラムをこなして帰国できるか少々不安もありました。今回の校外学習では9日間の行程である「1週間コース」と17日間の行程の「2週間コース」の2つのコースを用意し、生徒が希望に合わせて選択できるようにしました。カナダ校外学習の中心となるのは、「ホームステイ」と「考察アクティビティ」と称するグ

ループ別活動です。10名程度の本校生徒にバディが2名、コーディネーター(講師)1名が1つのグループとなって3日(または4日)間を1つの活動単位として研修を行います。基本的に活動は①事前のディスカッション、②本活動、③振り返りのディスカッション・意見発表の流れとなるよう構成しました。1週間コースの生徒は1つ、2週間コースの生徒は2つの考察アクティビティを選択します。考察アクティビティには、「自然・音楽」、「スポーツ・音楽」、「先住民文化」、「多文化主義」、「国・国境」の5つのテーマを設定し、それぞれのテーマごとにエコトレッキング、アイスホッケー観戦・体験、UBC人類学博物館訪問、イスラム教やシーク教寺院訪問、アメリカへの越境体験などの活動を行いました。

盛りだくさんのプログラム、慣れない環境、しかもホームステイで気を遣いながらの生活と16歳の高校生には少々負荷がかかりすぎた面もありますが、坂戸高校の生徒はそれを乗り越えて、少し成長した姿で自宅に帰ることができたようです。本校にとってもプログラムの内容、ホームステイや現地コーディネーターの質の確保など改善すべき事がたくさん見えた第1回のカナダ校外学習でした。次回以降、カナダ校外学習がより充実した取り組みになるよう、校内での連携・引き継ぎ

をしっかりと行うようにしたいと考えております。生徒だけでなく、引率教員にもかなりの負荷のかかる行事でしたので、この点も改善の必要があるようです。





姉妹校締結

台湾台中第一 高級中学との交流

附属駒場高等学校 主幹教諭 更科元子

台湾台中第一高級中学との交流は2009年に始まり、7年目を迎えた。交流開始当初より、英語発表指導、生徒の探究的な学習指導の成果が蓄積されて今日に至る。2015年度は12月8～13日の6日間で台湾を訪問した。高1～2から16名の生徒が参加し、今回は姉妹校締結調印のため、林校長も引率に加わった。

台中一中訪問の第1日目は歓迎セレモニー及び姉妹校締結調印式の後、2つの授業に参加した。午前中は物理の実験で、太陽電池に照射する光量と発生する起電力の関係を調べるという物理オリンピックの課題に取り組んだ。お昼休みは長めに設定されており、バレーボール等で緊張がほぐれた様子。午後はプログラミングの授業で、LEDの点滅パターンをプログラムする、というものだった。2つの授業はいずれも体験型の共同作業中心の授業であったため、意思の疎通が取りやすく、交流を深めることができた。その後互いの学校紹介をし、台中一中生徒による伝統楽器の音楽演奏等が行われた。2日目には訪問の中核となる研究発表があった。本校からはSSHとして生徒が研究した7本の発表があり、情報・一般・化学・数学・環境科学の研究発表を行った。本校からの水俣病に関する発表では、現代社会の難しい課題の解決を目指し国際的に協力しなければならないという雰囲気になり、国境を越えて未来を語り合う日台の若者に頼もしさを感じた。

参加生徒はこの交流で大いに刺激を受け、学校に戻ってから国際交流報告会で体験していない生徒へのフィードバックを行った。報告会を実施することは、参加した生徒には体験の内在化を促すことになり、未参加の生徒には次は自分が行きたいという目標を与える効果があった。今後も学校として積極的に国際交流に取り組み、生徒の視野を広げたい。

本校からの発表



物理実験の様子



インド視覚障害者に 日本の手技療法教育を

附属視覚特別支援学校 教諭 寺崎直

本校鍼灸手技療法科では、2013年1月からの3年間、インドでJICA草の根事業「視覚障害者の職業教育支援」を行いました。これは1000万人以上いるインド視覚障害者の職業的自立の為、300年来行われる日本の盲学校での手技療法教育を伝え、その教育、及び職業を根付かせることを目指したものです。インド国立視覚障害者施設(NIVH)からの強い要望に基づき始まりました。

2校のモデル校を設定し行った本支援は、大きく3つの部分から成り立っています。

1. 現地教育環境の整備:日本で高卒3年課程の手技療法教育をインドでは高卒2年課程とし、現地人教員育成、カリキュラム、シラバス、各科目教科書の英語版整備、教室、実技室、教材(模型)等、日本の盲学校に準じたものを揃えました。事業開始1年でこの段階を終え、後2年は現地教員が実際に生徒を教え、教育課程を運営しながら各所に改善を加えました。

2. 社会での意識向上、啓発活動:視覚障害者が治療を行うことも、日本の手技療法それ自体も、インドでは全く初めてです。両国の教員や生徒が各地を回って啓発、意識向上活動を行いました。この活動の多くはマスコミでも取り上げられ、各地病院や盲学校、地域の患者さん達から受け入れて頂きました。

3. 就職先開拓:2年課程を卒業した生徒が就職し、治療家として働くことが出来てこそその職業教育です。本事業では就職先開拓を行い、病院、ホテル、マッサージ治療院への就職を得た他、治療院開設の支援も行って卒業生全員の就職を目指します。

今年1月、モデル校の卒業式に本校校長が出席し、晴れやかな顔のインド人卒業生達に教育長からの修了証を授与しました。インド省庁にも正式な職業教育と認定され、今後は免許制度や教員養成施設の設置が目標です。今年本校と国際交流協定を結ぶインド国立視覚障害者施設と今後も活動していきます。

卒業式



模型を使って解剖学の授業



筑波大情報科学類の学生との アプリの共同開発について発表しました

附属桐が丘特別支援学校 教諭

齋藤 豊



3月13日(日)にApple Store銀座で、附属桐が丘特別支援学校と情報科学類との連携研究に関する発表「TEACHER'S NIGHT: iPadが変える学び『コラ

ボレーションと問題解決』」が行われました。

桐が丘の生徒達は、授業を受ける際に様々な困難を抱えています。例えば、資料を入れ替えたり、めくったりすることが難しいこと。文字を整えて書くことが難しかったり、時間がかかったりすること。他にも障害の状態によって様々な困難が存在します。そういった状況の中、iPadを活用することで困難を改善・克服しようとしている生徒がいます。ただ、既成のアプリの利用だけでは、改善・克服できない困難も少なくないのです。

桐が丘の数学科、白石教諭は生徒が行う数式の入力方法について悩み、情報科学類の櫻井鉄也教授に相談しました。そこから情報科学類との連携が始まりました。

桐が丘特別支援学校とのアプリの共同開発「COINS-Project AID」を立ち上げ、桐が丘の生徒達の使いにくいと感じる部分や、「こうして欲しい」という要望を聞き、生徒達にとって使いやすいアプリを開発してくれているのです。

この取り組みは4年目を迎えています。Apple Store銀座での発表では、それまでの3年間の取り組みについて、白石教諭、櫻井教授だけでなく、「COINS-Project AID」の現代表である、障害科学類生の三浦一也さん、そして、当事者である桐が丘の代表生徒4名がプレゼンを行いました。

生徒達のプレゼンにはこの連携研究によってできたこと、そして、それによって感じた自分自身の変化等についての説明がありました。分かりやすく、時には笑いもとる、素晴らしい発表でした。

当日はたくさんの方々が来場し、マスコミの取材も多くありました。さらに、その様子はPodcastにて動画配信されています。もし、お時間がございましたら、ご覧いただけると幸いです。キーワード「iTunes 筑波大学」で検索してください。



Apple Store, Ginza
©Censure Tomuro



未来の教室でプログラミング

附属小学校 教諭 鷺見辰美

まずは、みんなで相談しながらレゴブロックを組み立てる。そして、タブレット端末にプログラムを打ち込んで、組み立てたブロックを動かす。思うように動かなければ、プログラムを変更して、再度挑戦してみる。最初の目的を達成した子供たちは、グループで相談しながら、新たな目標に挑戦する。そこでは、子供たちが試行錯誤しながら、創造性を発揮する姿が見られることになる。

車を走らせ、障害物があればUターンして、元の位置に戻る。たったそれだけの動きでも、プログラムに初挑戦する子供たちは、友達と相談しながら、試行錯誤することになる。タブレット端末に、プログラムを打ち込み、動きを確認しては、再度やり直す。打ち込むプログラムは、小学生でもわかりやすいようにブロック化されている。それを並べ替えて、目的の動きができるように修正を加えていく。物が近づくと感知するセンサーをどのように活用するの

か、物を感知した後のモーターの出力をどのように制御すればよいのか、単純な動きの中にも考えなければならないことがたくさん存在している。

単純な目標でも、試行錯誤した結果の成功は、子供たちにとって大きな喜びとなる。未来の教室には、一人一人が使うことができるタブレット型パソコンがある。そして、自由に動きやすい空間がある。その場所で、子供たちが自分たちで工夫する喜び、目標を達成する喜び、協同で活動する喜びをたくさん味わっている。



Fieldwork in Japan(FIJ)での活躍

附属中学校 主幹教諭
関谷文宏

FIJとは、半世紀以上の歴史のある全国中学校地理教育研究会が主催する、全国中学生地域研究発表会のことです。平成27年度で第14回を数えるこの会では、全国各地の中学生が社会科の授業や総合的な学習

の時間などで身に付けたフィールドワークの技能を生かして、地域の地理や歴史、生活・文化などを観察・調査・研究した成果を持ち寄り、ステージ発表を行ったり、地図にまとめた作品を用いてポスターセッションを行ったりして、それぞれの地域を見直したり、新たな発見をしたり、地域への愛着を深めたりしてきました。附属中はFIJの常連の発表校で、今年は東京都の他、岡山県、香川県、京都府の中学生約80名が参加しました。地理を専門とした文部科学省の教科書調査官と大学の先生方数名が審査にあたり、平成28年3月の発表会では、地図コンクール(ポスターセッション)の部門で当時中学2年生の宝地戸海羽さんが最優秀賞、伊原沙彩さんが優秀賞を受賞しました。

宝地戸さんは『北千住は美容院激戦区か』を主題として、表参道と北千住の美容院のカットの料金、客層、店の特徴について現地調査の結果などをもとにして比較し、地図を用いてその違いをわかりやすく表現したことで、高い評価

を得ることができました。伊原さんは『国分寺崖線の魅力を探る』を主題として、多摩川が5万年以上かけて武蔵野台地を削り取ってできた地形を調査し、魅力あるスポットや今後の保全のあり方を考察して、具体的な提案まで行ったことが評価されました。

グローバル化の進展する社会の中で、附属中学校では、こうした地域の規模に応じた地理的な特色をとらえる学習を通して、足元の地域の自然や産業、人口、生活・文化、防災等にかかわる考察を積極的に行い、“Think Globally, act Locally”の理念を体現できる生徒の育成に力を入れています。



全国聾学校合奏コンクールで 小学部5年生が銅賞！

附属聴覚特別支援学校 教諭 山本カヨ子

師の介入なしでは合わせることが難しかったが、次第に曲の流れの中で、歌詞やそれぞれが自分の手掛かりとなる友だちの楽器の音や動きを感じ取り、ズレに気づくようになっていった。

子供たちが私の予想をはるかに超えて、自主的にそして楽しみながら練習を重ね、小中高等部生をすべて含めた審査の中で見事3位受賞。5年生13人の気持ちが目標に向けてひとつになったことは、何より嬉しかった。また、聴覚の障害を乗り越えて、音を楽しむ姿に改めて私自身学ぶことがたくさんあった。

受賞後、姉妹校であるパリ国立聾学校の生徒が来日した際に、演奏を披露する機会にもめぐまれた。大きな拍手をもらった時、子供たちの表情は喜びと自信に満ちあふれていた。子供たちが、またひとつ成長した瞬間だった。



聴覚障害者教育福祉協会が主催(文部科学省後援)する「全国聾学校合奏コンクール」に、1次審査通過を目標に初挑戦した。限られた授業時間内でどこまでできるのか、私の中でも予想がつかなかったが、選曲は子供たちの好きな「小さな世界」に決めた。

時間的にかなり無理なことに挑戦していることは、私自身が一番よく分かっている。子供たちの持てる力を引出しとめていくのが私の役目。それを肝に銘じ練習を開始した。

5年生は外遊びが大好きな子供たちが揃っているが、1次審査通過後は、朝も昼も休み時間に音楽室から楽器の音が絶えることはなかった。授業時間以外の練習時は子供から要求がなければ口を挟まず、ズレや間違いに対しても子供たち自身の気づきを見守った。友達と声を掛けあい、お互いの顔が見えるように楽器の位置を動かしたりして、あまりにも楽しそうに練習をしている姿に、口を挟めなかったというのが本当のところだが…曲の構成は模造紙に大きく書きいつでも目に入るようにして貼っていた。始めは教

卒業生を送る会

附属久里浜特別支援学校 主幹教諭

沼澤聡子

本校では、毎年3月に小学部6年生の卒業をお祝いする会を全校児童で行います。平成27年度は、3月10日(木)に実施しました。

会の司会は5年生の児童です。まず最初にスライドを使って6年生の紹介をします。今回は「誰かなクイズ」と称し、6年生の1年生の頃の顔写真を見て、だれなのかを当てるクイズ形式でした。なんとなく面影がある写真を見て、「〇〇君!」「〇〇さん!」と手を上げて、次々と当てていました。男の子より女の子を当てるのが難しかったようです。

その後は、みんなでダンスを踊ったり歌をうたったりして楽しく活動し、各学年から卒業生にお祝いの色紙を渡しました。6年生はお礼の言葉を言った後、器楽演奏を行いました。ハンドベルの「きらきらぼし」「よろこびのうた」の演奏は、とても上手でした。

最後は、1年生から5年生までが順番にお別れの握手をしました。お別れが寂しくて「おめでとう」と言いながらも泣きじゃくる3年生。それを見て、涙ぐむ6年生の姿もありました。

6年生のみんな、卒業後も元気いっぱい頑張ってほしいと思います。



6年ハンドベル演奏



お祝いの色紙を渡す



みんなでダンス!

祝卒業! 心をこめておめでとう

附属大塚特別支援学校 前副校長

高橋幸子

3月15日、平成27年度大塚特別支援学校の卒業式、修了式が挙行されました。卒業生修了生は20名。小学部から高等部まで48名の在校生が心をこめて旅立ちを祝いました。

卒業生一人一人が輝く演出はもちろん、わかりやすさと当日まで積み重ねた練習の成果が本校卒業式の見どころです。会場は卒業生と在校生が向かい合い、それを見守る形で保護者席があります。真ん中には盛り花が飾られたテーブルが置かれ(ちなみにその水盤は19年前の卒業製作作品です。)テーブルの周りを赤い絨毯が囲み、卒業生が歩く場所を示しています。「トトロのマーチ」「花のワルツ」「ビリーブ」「ありがとう」など本人のリクエストによるBGMが流れる中、証書を受けとった卒業生は赤い絨毯をおもむろに歩き始めます。拍手が鳴りやむタイミングで担任が賞状文を読み上げます。「いつもお手伝いを頑張ってくれました」「上手に気持ちを伝えられるようになりました」「後輩に慕われより一層活躍しました」「切れ味のあるパフォーマンスはみんなの心をひきつけました」など、在学中のさまざまな場面がつぶさに目に浮かんできます。ゆったり誇らしげに進む人、少し恥ずかし気に小走りに進む人、様々です。中には注目されるのが苦手な人もいます。時に立ち止まりながら、でも意を決したように歩き始める姿に会場は感動に包まれました。

圧巻は何といっても各部の「呼びかけ」。2月中旬から毎週の合同朝会をはじめ各部で練習を積み重ねたものです。在校生の「卒業生の思い出を胸にこの大塚特別支援学校を信じあえる仲間たちの学校にしていきます」の決意は、心強いはなむけの言葉として響きました。

ご臨席賜った稲垣副学長からは「この学校で皆さんが大きく成長した様子を想像し、胸が熱くなりました」「この学校は皆さんの故郷です。いつも皆さんを応援しています」とのご祝辞をいただき、会場の思いが一つに重なりました。心より卒業おめでとう。





第11回「科学の芽」賞

http://www.tsukuba.ac.jp/community/kagakunome/index.html

第11回 朝永振一郎記念 **2016年8月20日(土) ▶ 9月30日(金)**

募集期間



朝永先生の「科学の芽」のほうに自ら成長の不出産が、
発せし「科学の芽」を育ててきたことをまじえよう。
素朴な疑問・発見があるものを募集します。

作品募集

2016年7月
第5締め切り予定!

「科学の芽」賞

ふしぎだと思ふこと
これが**科学の芽**です

よく観察してたしかめそして
考えることこれが**科学の芽**です

そうして最後になぞがとける
これが**科学の花**です



筑波大学
University of Tsukuba

募集

科学の芽の賞に選んだ作品集



お問い合わせ先 **03-3942-6806**

レポート例(44頁)を参考に、1冊の科学の芽の賞にふさわしい作品を募集します。
対象は筑波大学一学部の学生、筑波大学付属中学校・筑波大学付属高等学校の生徒です。
募集期間: 2016年8月20日(土)～9月30日(金)までです。

募集対象: 筑波大学教員、筑波大学附属学校教員及び筑波大学関係機関の教員・学生
募集期間: 2016年11月下旬、筑波大学ホームページに掲載
募集内容: 科学の芽の賞の受賞作品は、筑波大学付属中学校・筑波大学付属高等学校の生徒が、科学の芽の賞の受賞作品として、筑波大学付属中学校・筑波大学付属高等学校の教員に提出し、審査されます。

募集期間: 2016年12月17日(土)まで、筑波大学付属中学校・筑波大学付属高等学校の教員に提出し、審査されます。

募集対象: 筑波大学教員、筑波大学附属学校教員及び筑波大学関係機関の教員・学生
募集期間: 2016年11月下旬、筑波大学ホームページに掲載
募集内容: 科学の芽の賞の受賞作品は、筑波大学付属中学校・筑波大学付属高等学校の生徒が、科学の芽の賞の受賞作品として、筑波大学付属中学校・筑波大学付属高等学校の教員に提出し、審査されます。

特別支援教育研究センターと附属特別支援学校5校の 協働による特別支援教育 教材・指導法データベース

特別支援教育研究センターでは、平成24年度より附属特別支援学校5校と連携して、附属特別支援学校5校のもつ優れた教材・指導法を広く発信するためのデータベース構築に着手し、このたび完成しました。このデータベースにより附属特別支援学校5校のもつ各障害種別の専門性を発信し、さらにそれらを融合発展させ、国内外に向けて優れた教育実践を広く発信することは、附属特別支援学校5校の専門性の維持及び向上のみならず、わが国と海外の特別支援教育の質の向上に資することができると思っています。

URL: <http://www.human.tsukuba.ac.jp/snecr/kdb/>



●広報誌名「ポローニア」の由来

「ポローニア」とは、「桐」の属名であり、Paulowniaと綴る。本誌を「ポローニア」と名づけたのも、筑波大学の紋章に「五三の桐」が使われていることに拠る。しかし、ポローニアを付与した理由が他にも存在する。近代西洋医学を日本に伝えたシーボルトは、日本において、桐が瑞祥の象徴と見なされ、皇室をはじめ高貴な家柄の紋所として用いられていることを知り、Paulownia（後援者のオランダのパウロウナ公妃に因む）こそが植物の桐のイメージを表現していると考え、桐の学名(Paulownia imperialis)に定め、パウロウナ公妃に献呈した。今後いつまでも、多数の読者に愛され続けることを願い、ポローニアの故事来歴やエピソードに基づき、ポローニアと命名した。

ポローニア
paulownia

vol.36

発行日……平成28(2016)年5月31日

発行者……附属学校教育局教育長 宮本信也

発行所……筑波大学附属学校教育局 広報誌
広報戦略推進委員会

〒112-0012 東京都文京区大塚3-29-1 電話 03-3942-6800

デザイン……スピーチ・パルーン

印刷……広研印刷 使用紙: U-Itimax [日本製紙]

